



(1) At the Time of the Earthquake of 1923, the Seawall and Lighthouses at Yokohama Sank Four Meters,  
Photograph Shows 50 ton Floating Crane Lifting One of the Lighthouses, in Sections.

## 横濱燈臺の復舊工事

### 横濱港

北水堤燈臺 第四等、下部コンクリート、上部  
鐵造六角形紅色塗、アセチリン瓦斯明暗紅  
光燈、燭光數八百、光達距離十二浬五、燈  
高平均水面上十五米五五

東水堤燈臺 第五等、下部コンクリート、上部  
鐵造六角形白色塗、アセチリン瓦斯明暗白  
光燈燭光數千三百、光達距離十二浬五、燈  
高平均水面上十五米五五

此の二燈臺は、東及北防波堤の頭部にあり、横  
濱港の所謂港門燈臺として、ともに明治二十九年  
臨時横濱築港局の建設になつたものである。當時  
は光源に石油燈を點したが、燈火の發達と海運の  
隆勢に連れて燈器を改良し、等級を昇格し又は燈  
質を變更する等、時代適應の施設に努め、通航の  
安全を維持し出入船の期待に應じて來た。明治四  
十年頃までは、職員を交代で晝夜兩燈臺に勤務せ  
しめたが、經費節減のため燈火を晝夜燈となして

(1) 大正十二年九月一  
日の大地震で四メートル沈  
下した横濱燈臺の復舊  
工事に於て、燈塔下室  
上部を切離して五十噸  
クレーンで吊上げてゐる  
状況である。

何百年か焚き續  
けた篝火の燈臺  
燈臺の起源は既に一千餘  
年前、我國が遣唐使をや  
つた頃支那との往復繁  
となり、從つて海上漂流  
遭難するものが多くなつ  
たので承和六年大宰大貳  
に勅し、防人をして夜間  
炬火を點じて絶えざらし  
めたのが我國に於ける燈  
臺の濫觴である。それは  
今より千八十六年前であ  
る。其後慶長年間豈後國  
姫島にて篝火を設け、爾  
來明治初年に至る迄繼續  
してをつた。其後志摩管  
島にも篝火を設けた。